

第2回“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会次第

日 時：平成27年10月6日（火）

13：00～15：00

場 所：西陣織会館 第1談話室

1 開会

2 挨拶

3 議事

「京のきもの文化－伝統の継承と新たなきもの文化の創出－」（案）について

4 閉会

【配布資料】

①次 第

②名 簿

③配席図

④資 料

資 料	1
-----	---

「京のきもの文化－伝統の継承と新たなきもの文化の創出－」（案）

資 料	2
-----	---

今後のスケジュール

参考資料

第1回審査会摘録

“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会委員名簿

(委員長及び副委員長以外は五十音順, 敬称略)

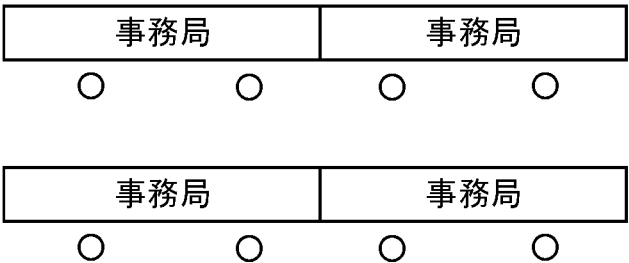
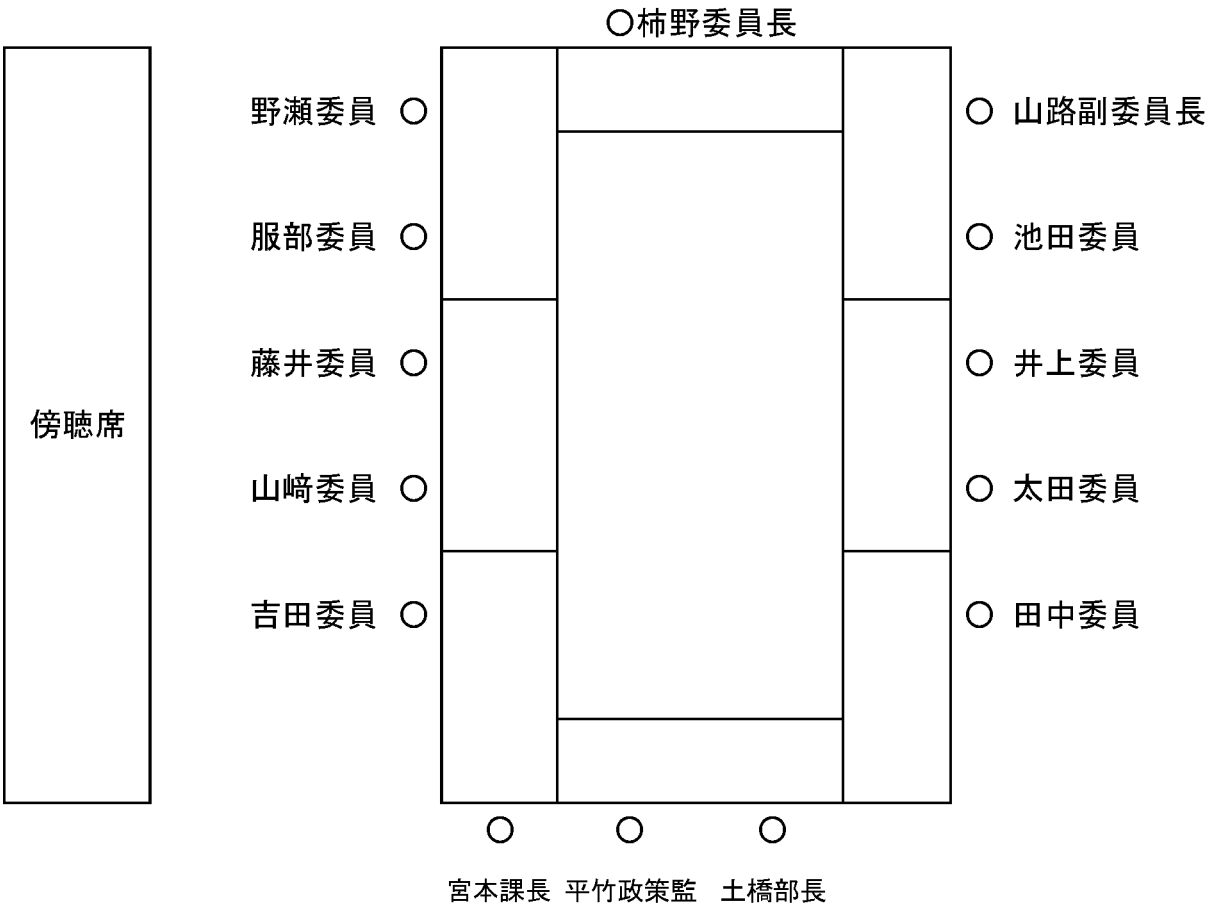
	氏 名	役 職
委員長	柿野 欽吾	京都産業大学理事長
副委員長	山路 興造	京都市文化財保護審議会委員
委員	池田 佳隆	(公財)京都和装産業振興財団理事長 京友禅協同組合連合会理事長
委員	井上 安寿子	京舞井上流
委員	太田 達	(公財)有斐斎弘道館代表理事
委員	金剛 育子	(公財)金剛能楽堂財団業務執行理事
委員	田中 京子	市民公募委員
委員	野瀬 兼治郎	京都織物卸商業組合理事長
委員	服部 正毅	西陣織工業組合副理事長
委員	藤井 浩一	(特非)きものアルチザン京都理事長
委員	宗田 好史	京都府立大学生命環境学部教授
委員	山崎 さちよ	市民公募委員
委員	吉田 満梨	立命館大学経営学部准教授

(※ 金剛委員, 宗田委員は御欠席)

第2回“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会配席図

日時:平成27年10月6日(火)13:00～15:00

場所:西陣織会館 第1談話室



出入口

素案

京都をつなぐ無形文化遺産

「京のきもの文化」

ー伝統の継承と新たなきもの文化の創出ー

選定にあたって	2
きものの成り立ちと現状	4
きものの魅力	6
京都のきもの文化を支える技・ひと・道具	7
きものと和の文化	13
伝統の継承と新たなきもの文化の創出	16
(参考) きものの種類等	17

選定にあたって

きものは長い歴史の中で受け継がれてきた、日本が世界に誇る民族衣装である。「着物」は、「洋服」に対する言葉として、「和服」を指して用いられ、今では「kimono」として国際的に通用する衣装になっており、外国の方がきものを買い求めることも少なくない。

京都は、山紫水明の自然、1200年を超える歴史の中で人々が築いた景観が相俟って、美しいまちを形成している。そして、京都の人々は、花を愛で、鳥の声を聞き、風を感じ、月を眺め、自然に対する畏敬と親しみの念を持ち、四季の移ろいを大切にしながら、豊かな文化を創造してきた。きもの文化は、このような京都の自然、まち、人々により育まれた。

また、きものは、茶道、華道、香道、能・狂言、日本舞踊といった、我が国固有の文化とともに、発展してきた。現在でも、京都には、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元、花街、町家など、「和」の文化の源泉が存在しており、京都は日本のきもの文化の中心となっている。

その歴史は、平安時代からの宮廷を中心とした「みやびの文化」の広がりとともに、様々な技術・技法・意匠を用いた手工業が発達、集積してきた。なかでも、京都の伝統産業を代表する「西陣織」は、平安京に設けられた「織部司」がもととなっており、その高い技術は世界的に認められている。「京友禅」は染色技術が発達した江戸時代に創案され、その華麗な意匠は、憧れとなっている。京都のきものの生産工程は、多品種少量の高級品生産に応えられるよう、分業が著しく発展しているのが特徴である。

京都では、歴史や文化を背景に、繊細な職人の技による、形、色、模様のすべてに和の文化の粋が投影された、日本の美意識の集大成ともいえるべき、伝統と格式を備えたきものが、維持継承されている。

このようなきもの文化の発展は、最大の生産地、集散地としての強固な産業基盤の支えによるものであるが、近年、その基盤が揺らいでいる。生活様式の変化などにより、きものの消費は落ち込み、後継者の不足で貴重な技術が年々失われている。

一方、和の文化を再評価する気運の高まりとともに、和のエッセンスを取り入れつつも、格式にこだわりすぎず、現代的なファッション感覚で気軽にきものを楽しみたいというニーズが高まっている。そして、京都は、きもの文化の中心として、こうしたニーズに応える新たなきもの文化を創出し、全国へ発信していく役割が期待されている。

「伝統の継承」と「新たなきもの文化の創出」、京都には二つの面が求められているが、伝統を守りつなぎながら、時代の変化に即して新たな文化を創出し、両者の共生を図るなかで、懐の深い重層的な文化を作り上げてきた姿こそが、京都のきもの文化である。

現代において、我が国のように日常生活の中で民族衣装を着る習慣の残る国は、世界的に見ても希少な存在となっている。グローバル化が進むなか、海外の人々をも魅了する、四季の変化に富んだ豊かな風土に育まれた独自の感性が凝縮された、和の文化を象徴する存在としてのきものは、市民の誇りであり、守り継がなければならない我が国の貴重な財産である。

京都、そして日本になくてはならないきもの文化が、悠久の歴史が育んできた優れた美意識、伝統の神髄を継承しながらも、現代の感性で意匠や着こなしを変えつつ、未来にわたって市民生活の中できものが愛され続けていくよう「京のきもの文化 ―伝統の継承と新たなきもの文化の創出―」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

きものの成り立ちと現状

項目	内容・特徴
きものの 成り立ち	きものの歴史は、縄文時代、一枚の布を巻きつけた巻布衣、布の真ん中を切って頭を出す貫頭衣に始まる。大陸文化の影響を受けて筒袖のものが現れ、平安時代には日本の気候風土に合わせ、身幅や袖幅がゆったりとした男性の束帯、女性の十二単が貴族の装束となる。武家社会に移ると、動きやすさが重視されて袖丈の短い小袖が主流となった。室町時代頃の小袖は、袖幅が狭く、お端折りのない実用的な衣服であった。桃山時代に豪壮華麗な文化を背景に小袖は派手になる。江戸時代に入ると、素材や模様、帯の結び方、髪形、小物の細工など凝ったものが生み出されていった。 明治以降は、洋装が入ってきて、きものの柄も洋風のもが見られるようになった。生活習慣も西洋スタイルに次第に変化するなか、きものは大切な儀式やぜいたくを楽しむ象徴となっていった。 「きもの」という名称は、桃山時代に、小袖を「着るもの」、「きもの」と呼ぶ例が見られ、公家・武家階級が身に着けていた大きな袖口を持つ「大袖、広袖」が着られなくなると、明治時代には和装を表す言葉となった。今では「kimono」は、国際的に通用する言葉になっている。 (貫頭衣, 巻布衣) (十二単, 束帯)  (桃山時代の小袖) (江戸時代の小袖)  ※仮画像

現状と課題	戦後、たんすが空っぽの状態から人々はきものを買求め、高度経済成長期とともに、きものの生産量は飛躍的に伸びた。しかし、昭和50年代に入ると、日常の生活風景からきもの姿が消え、大衆呉服の生産量が大幅に減少していった。やがて、好調を保っていた晴れ着や式服など高級呉服の売れ行きも、バブル崩壊後は減少していく。 消費の低迷による最も大きな課題は、生産地が打撃を受け、きもの文化を支えるものづくりの力が落ちていることである。生産量の減少は、きものづくりの根幹である分業制の維持を困難にし、後継者の不足により失われた技術もある。古い能装束などは二度と同様の品質で生産できないものがあるという。また、道具や原材料の製造事業者の廃業も広がっている。 一方、消費者においては、購入や着用することが少なくなるに伴い、品質や価格、場面に合わせたきもの着方、帯や小物の組み合わせなどの知識を習得する機会も減少し、わからないので敬遠するという悪循環に陥っている。そのため、着用機会の創出とともに、きものの似合う場面とふさわしい着こなしの提案、製造工程の公開など、より具体的でわかりやすい消費者への情報提供が必要となっている。
課題の解決に向けた取組	京都市では、行政ときもの関連業界が連携・協力し、きもの姿の方を対象としたコンサートなどのイベントの開催や、きもの展示会の実施、一定期間交通機関の利用や施設の入場が無料になるなど、きものの魅力をPRし、着用機会を創出する取組を積極的に推進している。また、きもの着用者には割引や粗品プレゼント等の特典が受けられたり、タクシーの料金が割引になるなど、民間企業における自主的な取組も行われている。 さらに、市立中学校における浴衣の着付け体験授業の実施や、小学生を対象とした「ジュニア京都検定」のテキストブックにおいて、きものを取り上げるなど、教育における取組の充実も図っている。

きものの魅力

項目	内容・特徴
きものの魅力	生活様式が変化するなか、着用機会は少なくなったが、きものの美しさや素晴らしさは再評価されている。 きものの魅力は、まず、四季を持つ日本の美意識が表現され、長い歴史の中で磨かれた文様や意匠などが奥深い和の文化を表している点である。 また、日本人の体型の長所を活かした、日本人に似合う装いでもあり、きものと、帯や小物の組み合わせ次第で趣が変わり、幅広いお洒落が楽しめる魅力も大きい。 男性のきものにおいては、羽裏や襦袢、しゃれ紋など、隠れたお洒落が楽しみの一つである。 高価な印象もあるが、流行が少なく、多少の体型の変化にかかわらず、長く着ることができ、ほどけば一枚の反物に戻り、多様な仕立て直しが可能のため、大切に保管して、世代を超えて子や孫へ受け継がれるものも多い。 きものを着ることで注目されること、周囲の目を楽しませることなども魅力の一つである。
きものを通して磨かれるところ	きものは、長く着るものであり、親から子へ大切に引き継がれる。そのため、家庭では、きものを着る時には手を洗い、虫がつかないようにきっちりと畳んで保管し、季節ごとの虫干しなどに気を配る。破損した場合も、繕ったり、端切れをつなぎ合わせたり、裏地にしたり、工夫して大事に扱われた。こうした家庭の営みの中で、ものを大切に扱うことを子どもたちは自然に学んでいった。ものを大切にすることは、現代のエコロジーの精神にも通じる。 きものを着ると、自然と背筋が伸びて、美しい所作が身についてくる。動きが制約されるからこそ、周りに気を配る心遣いが生まれてくる。 京都には、普段はしまつしているが、着るものにこだわり、特別な晴れの日に質のいいきものを着る気風があるが、これは、相手をもてなすために着るという考え方、おもてなしのこころに通じている。
きものの映えるまち	きものの映える日本らしい町並みをきもの姿で歩くことは、非日常を体験することにつながり、観光の楽しみの一つとなる。

	きものの映えるまちとして、代表的な観光地である京都では、国内外から訪れる旅行者等がきものや浴衣を着て、祭などの行事に参加したり、社寺等を散策するなどの楽しみ方も定着してきている。
--	--

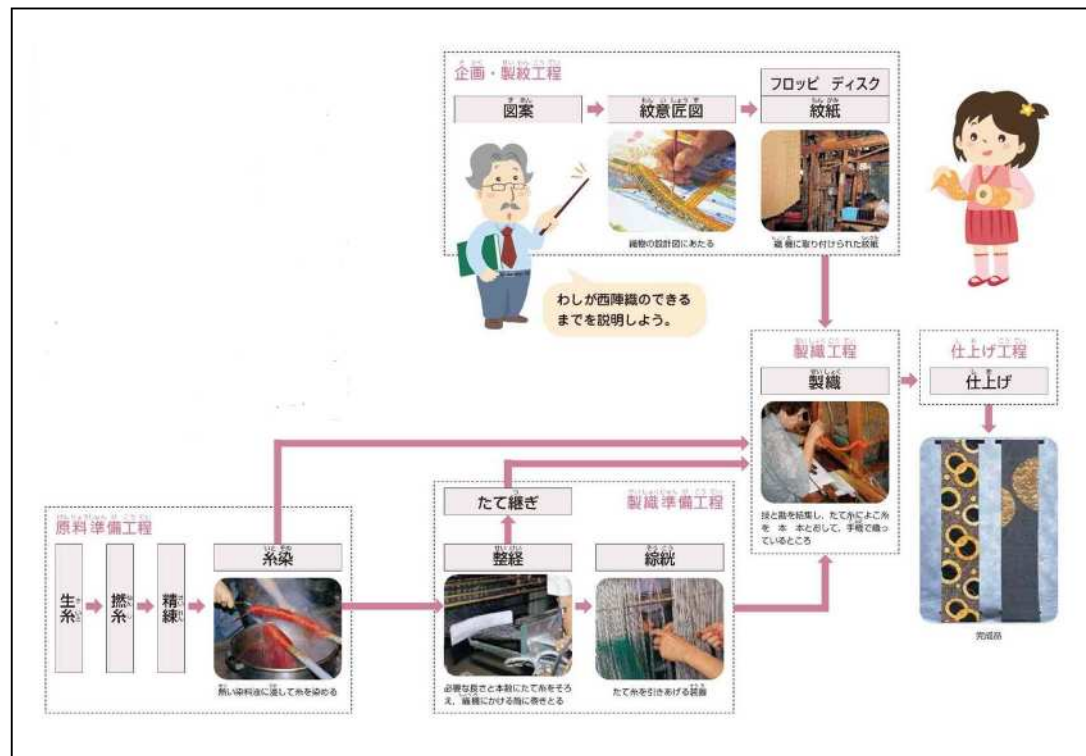
京都のきもの文化を支える技・ひと・道具

項目	内容・特徴
きもの文化が育まれた背景	三方を雄大な山々に囲まれ、鴨川などの豊かな水に恵まれ、寒暖の差の大きい気候のもと、四季が鮮やかに移ろいゆく京都では、自然との共生を大切にしてきた。また、平安京遷都以来、永きにわたり都が置かれ、文化の中心地として栄えるなかで、季節感やおもてなしの心、本物へのこだわりといった精神文化が育まれ、きもの文化に浸透していった。
京都のきもの歴史	平安京への遷都が行われると、朝廷では絹織物技術を受け継ぐ工人たちを、織部司という役所のもとに組織して、綾・錦などの高級織物を生産させ、貴族の彩色豊かな衣服がつくられていった。鎌倉時代に入ると、武士の天下となり専従職人たちは解雇されるが、大舎人町というところに集まり、大陸から伝えられる新しい技術を取り入れながら、生産を続けた。 応仁の乱で京都の街は焼け、職人は各地に四散するが、戦乱が終わると戻った職人が、西軍の陣地跡で織物業を再開し、まちは「西陣」と呼ばれるようになった。江戸時代には、小袖の発展とともに、きものを留める紐であった帯が装飾的となり、存在感を示すようになった。 きものの流行は、京都から発信された。高級呉服商雁金屋に生まれた尾形光琳は、元禄時代を代表する絵師であるとともに、きもののデザイナーとしても活躍した。また、江戸時代中期には、京都で人気のあった扇絵師宮崎友禅齋も、呉服商からの依頼を受けて、きものの図案のデザイナーとして活躍し、自由で斬新なデザインの友禅染は、大流行した。当時の意匠、織技術、染色技術などは圧倒的に京都が突出しており、その流行は上方から江戸へ伝播し、やがて全国へと広がった。また、街道の整備や経済の発展により京都と地方の取引が盛んになるにつれ、全国各地に技術が伝わった。 尾形光琳のほか、竹内栖鳳、堂本印象ら京都を代表する画家たちが友禅の下絵を描くなど、絵画的な美しさが磨かれていった。

きものを 支える 技・ひと	(重要無形文化財保持者等) 有職織物、友禅、羅、刺繍などの技術が重要無形文化財とされており、その高度な技を体得し、精通されている方が、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている。 また、染織の技は、祇園祭等における文化財を保存する技術（選定保存技術）としても選定されており、京都の祭礼文化を豊かにしている。 (伝統産業) 伝統的な技術と技法で、日本の文化や生活に結びついている製品を作り出す産業として、京都市では伝統産業74品目を指定しており、このうちの多くは、きものに関わる産業である。 ○ 西陣織 5～6世紀頃、豪族・秦氏が養蚕と織物をはじめたことに起源し、15世紀応仁の乱の後に基盤を築く。西陣織は極めて多種多様で、綴、経錦、緯錦、緞子、朱珍、紹巴、風通、縋り織、本しば織、ビロード、絣織、紬等の品種があり、多色の糸を使用し絢爛豪華な糸使い模様の精緻さを特色とする。 ○ 京鹿の子絞 10世紀初頭の宮内での絞り染めを起源とし、17世紀には「かのこ」の名称で広く愛用される。絹織物の生地、多種のくくり技法と、染め分け技法を駆使した複雑多彩な模様染めである。 ○ 京友禅 古くから伝わる染色技法を、17世紀後半に宮崎友禅齋が集大成したことからこの名がついた。現在、高度な技法を受け継ぐ手描友禅と明治初期に創案された型友禅がある。型友禅の出現は友禅を庶民のものにした。 ○ 京小紋 起源は17世紀初頭で江戸時代の武士の袴に端を発している。明治初期より単色から彩色へと変化しながら友禅染と互いに刺激しあって技法を向上させてきた。色柄は、落ち着いたきのある渋さが特徴である。 ○ 京くみひも 平安時代が起源とされ、帯締、羽織ひもを主に根付ひもなど80種近くの種類を生産。丸台、角台など幾つもの組台を使う手仕事で、古都の文化に培われた雅な京工芸の一つである。 ○ 京縫 その起源は平安遷都にさかのぼり、貴族の繡衣繡仏、武具などに活用され発達した。絹や麻の織物に絹糸、金糸、銀糸などを用いた刺繍は15種以上に及ぶ技法が使われている。
------------------------------	--

	○ 京黒紋付染 喪服，黒紋付などに用いられる伝統技術である。赤や青に染めてから黒色染料で仕上げるのを，紅下黒，藍下黒とよび，それらは独特の風格をもっている。 ○ 京足袋 戦前には35軒ほどあった京都の足袋屋も今ではわずかに数軒となった。生地には吸湿性のよい木綿が用いられる。伸縮性の少ない生地を用いて，足にぴったりと添う足袋に仕上げるには，高度の熟練が必要とされる。 ○ その他 花かんざし，京和傘，京扇子等も，きものに関わりの深い伝統産業製品である。 (西陣織)  (京友禅)  ※仮画像
分業制	西陣織や京友禅など，京都のきものの生産工程は，複雑に細分化された分業制であることが特徴である。各工程は，それぞれ高度の技術を持つ専門の職人が担っている。分業制のもとでは，注文された品を逃えるため，各工程をつないでコーディネーターのような役割を果たす「悉皆」「染匠」と呼ばれる職種が存在する。分業制により，多品種少量生産のニーズにも対応することが可能となっている。

西陣織の主な工程



京友禅の主な工程



(出典：わたしたちの伝統産業／発行：京都市、京都市教育委員会)

	近年は、一つの工房で複数の工程を担う生産体制を導入しているところもある。 また、新たな製織技術、インクジェット捺染技術、紋織物関連のデータを処理するソフトウェアの開発などが進んでいるほか、ARによる情報提供や3Dプリンターによる道具製作など、新しい技術を活用する研究も始まっている。
きものを支えるまち	分業制による生産工程は、多くが職住一体型の小規模な家内工業であり、注文に応じて、各工程を担う職人が有機的関連性を持ちながら、きものを作りあげている。そのため、職人は集まってまちを形成し、まち全体が一体となって効率的にきものを生産してきた。 また、きものは、集散地問屋、地方問屋、小売店・百貨店などの流通を経て消費者の手に届けられるが、こうした流通を担う呉服商も集まって、まちを形成している。 ○ 西陣 西陣織のまちであり西陣は日本最大の和装織物の産地である。起源は平安時代以前にまでさかのぼり、その名は、応仁の乱の後、西軍が本陣とした場所に職人が集まって織物の町を形成したことに由来する。 袋小路となった細い路地の両側に十数軒の家が並び、ひとつの独立した家の門構えのようにになっているのが特徴である。また、織屋の家は、背の高い織機が入るため1階の天井が高く、上の階が狭い、独特の織屋建である。 ○ 堀川 かつては京友禅の染料を定着させるための友禅流しが、堀川や鴨川で行われており、染工場などが地域を支えてきた。 ○ 室町 家康の時代から始まると言われる呉服商のまちであり、江戸時代、室町界限は日本の商業の中心地として茶屋四郎二郎や三井家、住友家、松坂屋等の店が軒をならべた。従業員は店や路地に住み、職住一体で生活をしていた。 呉服商の町家は、奥行きの長い敷地の表部分に店があり、玄関と坪庭を挟んで奥に居住部分のある表屋造りが多い。 格子は、京町家の特徴の一つであるが、きもの関係の町家においては、一般的に織物の色糸を選別しやすくするため、採光に考慮し、上部を空けた糸屋格子、織物格子と呼ばれる格子を持つものが多いといわれる。

道具類, 原材料	(原材料の例) ○絹糸 桑の葉を食べて育った蚕が繭になり，その繭を煮て取りだす。 ○染料 明治時代以前は，紅花，藍，紫草，刈安などの草木，樹皮，木の実，虫など自然界の染料で染めていた。現在は，多くが化学染料による。 (道具の例) ○織機 綴機，手機，力織機，ジャカードなどがある。 ○杼 糸を巻いた管を舟形の胴部に収めたもので，経糸の間に緯糸を通す。 ○はしご 糸をずらす道具で，緋加工に用いる。西陣で考案された独特の道具。 ○刷毛 京友禅に用いる。丸刷毛，引染用刷毛，とろ刷毛などがある。 (杼)  (丸刷毛)  ※仮画像
全国との つながり	仙台平，小千谷縮，加賀友禅，丹後縮緬，博多織，大島紬など，地域の名を冠した個性あふれる素晴らしい染織品が全国で生産されている。 また，道具類，原材料の生産地も，全国に広がっており，きもの文化は全国各地とつながり，支え合って成り立っている。 その中にあって，京都は，最大の生産地，集散地，そしてきもの文化のネットワークの中心として，きもの文化を創造，継承する役割を担っている。
きものを 着る人， 愛でる人	京都には，着るものをはじめ，言葉，所作，住まい，食べものなどすべてにおいて美しくあらねばならないという精神が根付いている。きものの美しさは，作り手や売り手のみならず，きものを着る人，愛でる人など，きものを扱うすべての人々の手により，育まれてきた。

きものと和の文化

項目	内容・特徴
きものと 伝統文化	きものと文化，人生の節目の儀式や行事などは，密接に関わっている。 茶道，能・狂言，日本舞踊など文化にとって，きものは不可欠の要素であり，きものと日本の伝統文化は相互に支え合っている。 ○ 文化 茶道，華道，香道，能，狂言，日本舞踊，花街，歌舞伎，剣道，弓道など ○ 儀式 宮参り，七五三，十三参り，入学式，卒業式，成人式，結婚式，葬儀など 近年は，和婚もブームになっている。 ○ 行事 正月，祭など また，きものは，日常生活の中にあって発展し，畳や襖などの和室のしつらえ，和食などとともに，日本の衣食住の文化をつくり，和の生活文化をつくってきた。
きものと 季節，風物	きものは，自然と深く関わり，季節感を大事にしてきた日本人の感覚，和の心が色濃く反映され，四季の自然を様々に写している。 色や柄のなかに，日本特有の季節，風物を表現したものが多く見られる。 ○ 色 きものに用いられる伝統的な色の呼び名には，自然の風物を表しているものが多く，季節感が感じられる。また，茶人の千利休にちなんで，抹茶の緑色と侘び茶の雰囲気을連想していわれた利休色など，人名に由来するものもある。 女性の重ね着の色合わせである「襲色目」でも，色の組み合わせで自然の色を表現している。 (色名の例) 鶯色，桜色，栗色，鳩羽色，桔梗色，若草色，利休鼠 (襲色目の例) 葵（淡青／淡紫），枯色（淡香／青），椿（蘇芳／赤）

(鶯色) (桜色) (栗色)



※仮画像

○ 柄

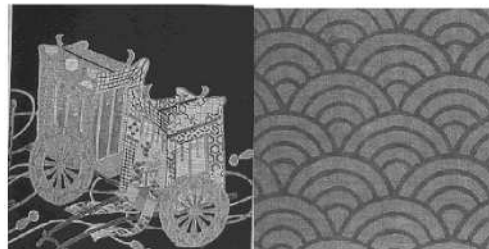
きものの柄は文様といい, 身近な植物や動物, 自然の風景, 身の回りの品々などを元にしたものが多く見られる。緋扇や御所車など雅な柄は礼装, 生活に密着した柄は洒落着などに用いられる。

(文様の例)

松竹梅, 菊, 楓, 菖蒲, 鶴, 雀, 御所車, 手毬, 瓢箪, 観世水, 青海波

(御所車)

(青海波)



※仮画像

○ 季節のきまりごと

きものの装いには, 季節による決まりごとがあり, 6月と9月は単, 7月と8月は紵や紗など透ける薄物や麻, その他の季節は袷を着用する。色柄も四季の風物が描かれたものなどは季節に合わせ, 少し先取りで身につけるのが粋とされる。

京都の年中行事や人々の暮らしは, 四季の移り変わりに応じて, 細かく配分されている。一年を四季, 十二月, 二十四節気, 十日毎の旬, 七十二候に分け, それに応じた数多くの行事を行いながら, 季節が移り変わっていく様を大切に見つめ, 日々の無事と自然への感謝を思いながら過ごしていくのである。

四季の変化を大切にする和の文化の特質が, きもの文化の特質にも通じている。

きもの由来 の言葉	きものは、日本人の生活に深く根差しており、日本語の中にはきものに由来する言い回しが多く息づいている。		
	例	意味	きものの部位等
	襟を正す	乱れた衣服を整える。事に当たって、気持ちを引き締める。	襟：衣服の首回りの部分
	折目正しい	礼儀正しい。	折目：衣服などを折りたたむときにできる筋
	袖触り合うも 多生の縁	道で見知らぬ人と袖が触れ合うのも深い宿縁に基づくものである。	袖：両腕を覆う部分
	袂を分かť	行動を別にする。	袂：袖の垂れた部分
	辻褄が合う	前後がきちんと合って、筋道が通る。	辻：縫い目が十文字に合うところ 褄：裾の左右が合うところ
	帯に短し 褄に長し	中途半端でどちらの役にも立たない。	帯：腰のあたりに巻く細長い布 褄：袖や袂がじゃまにならないよう背中で交差させ両肩にまわして結ぶひも。
	紺屋の白袴	専門としていることについて、それが自分の身に及ぶ場合には、かえって顧みないものである。	紺屋：布地の染色を職業とする家や職人 白袴：染めていない袴 袴：腰から下を覆う衣服

伝統の継承と新たなきもの文化の創出

項目	内容・特徴
伝統の継承	京都には、伝統と格式を重んじる厳格なきもの文化が歴然と存在している。 京都では、茶道や華道の稽古事などに関連して着る機会が多いこと、多く残る行事の際に「ハレ」のきものを着る慣習が色濃いこと、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元など「和」の文化の源泉が存在することから、着る頻度が高い、目の肥えた使い手が一定数あることにより、きちんとした伝統と格式を守ったきもの文化を大切に維持継承している。 こうしたきものの着こなしには、和の文化への深い造詣を必要とするため、難解であるとの声も多い。しかし、翻って、こうしたきものは、身につける人の文化的なステータスを表象する存在となるため、ここぞという場面で着ることのできる、質の高いきものが求められている。 また、グローバル化が進むなか、国内外における、外国の人々に関わる場や国際的な催しで、きものを着る機会が増えている。このような場では、自らのアイデンティティを表現する日本の美意識の集大成ともいえるべき伝統を継承したきものの存在が欠かせない。
新たなきもの文化の創出	その一方で、住まいの様式が和から洋になるなど生活様式が変化し、結婚式など節目の行事に対する考え方が多様化するなか、きものの購入形態の主流も、嫁入り道具など親が子にきものを誂える形から、自分好みのきものを自ら購入する形へと変わってきている。 現在、きものの消費全体は落ち込んでいるものの、和の文化に注目が集まるなか、きものブームが起こっており、自分らしく自由にファッションを楽しめる、お洒落着・日常着としてのきものが求められ、結果として、アンティークのきものや浴衣も広く着用されるようになっている。こうした需要においては、伝統や格式にとらわれすぎない、着やすく、手入れが楽で、現代的なセンスにあった色、デザインのきもののニーズが強い。 このような動きは、きものを愛好する人々の裾野を広げる意味で重要であり、きもの文化の中心である京都には、悠久の歴史が育んできた優れた美意識、伝統の神髄を継承しながらも、時代の変化に即し、多様化するニーズに応じて、現代のライフスタイルの中で着る新しいきものや着こなし方の登場など、新たなきもの文化の創出が求められている。

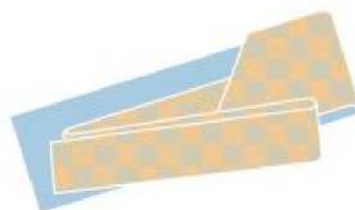
(参考) きものの種類等

項目	内容・特徴
きもの、 帯の種類と 小物	(主な女性のきもの) 訪問着：主に胸，肩，袖，裾などに模様がつながるように染めたきもので，広げると一枚の絵のようになる。略礼装として幅広く用いられる。 付下げ：袖，前身頃と後見頃の両面，衿の模様が上向きに配置されるよう染めたきもの。訪問着よりはややカジュアルに用いる。 色無地：全体を黒以外の一色に染めたきもの。紋をつくと礼装になり，紋がなければおしゃれ着となる。 小紋：模様を一方向に染めたきもので，日常のおしゃれ着として着る。 振袖：袖丈が長く，華やかに装う未婚女性の礼装，正装用のきもの。 留袖：黒地で染め抜きの五つ紋をつけ，前見頃に絵模様を施したきもので，既婚女性の礼装として用いられる。 喪服：弔事や法事に着る黒無地に五つ紋のついた喪の正装。 浴衣：木綿地で，襦袢をつけずに素肌に着るもので，元来は湯上り着や寝間着とされたが，現在は祭や花火大会等で着用される。 (訪問着) (付下げ) (色無地)  ※仮画像 (主な女性の帯) 丸帯：普通の帯の二倍の幅で織り，二つ折りにして仕立てられ，表裏に柄のある豪華な帯で，最も格式が高く花嫁衣裳などに用いられる。 袋帯：丸帯に代わる現代の礼装用の帯で，振袖，留袖，色無地，訪問着，付下げといった，礼装・準礼装などに合わせる。 なごや帯：お太鼓になる部分以外は二つ折りに仕立ててあり，締めやすいカジュアルな帯で，幅広く使える。 半巾帯：通常の約半分の幅で，帯揚げや帯締を使わない。浴衣等に用いられる。

(丸帯)



(なごや帯)



※仮画像

(主な男性のきもの)

- ・ 正式な礼装は、紋付羽織袴である。
- ・ 黒以外でも羽織，袴で紋が付いていれば略礼装とされる。
- ・ 普段着としては、紬や御召，ウールのアンサンブルなどが用いられる。

(主な男性の帯)

角帯：幅約20cmの帯地を二つ折りにして仕立てたもので、一般に固くしまったものが用いられる。兵児帯より格式がある。

兵児帯：やわらかい羽二重やちりめんの生地を用い、長さは3.5～4mである。子どもにも用いられる。



※仮画像

(主な小物)

帯締：女帯をお太鼓に結ぶとき、形を整えて仕上げて締める紐であり、組紐と布の紐とがある。前者には丸く組んだ丸打ちと、平らに組んだ平打ちがある。

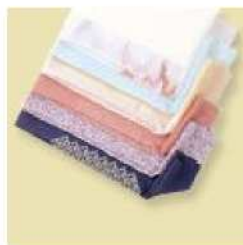
帯揚：女帯をお太鼓に結ぶとき、帯枕にかぶせて前で結び、帯を固定する。綸子、縮緬などを用いる。

半衿：長襦袢，半襦袢の衿に，汚れを防ぐことと装飾を兼ねてかける。

帯留：帯締と同様に，帯が解けないように用いるが，紐先に金具のついてるものをいい，普段着などに用いる。明治中期以降には，細工物を紐に通したものが多く現れた。

下駄：木製の台部に鼻緒をすげた履物。

(半衿)



きもの、帯、小物には、それぞれ種類や柄により格があり、礼装や略礼装、お洒落着や普段着などT P Oに合わせて用いる。コーディネートにより、格調高くも、カジュアルにも、着こなしを楽しむことができる。

	女性	男性
礼装	留袖 振袖	五つ紋付羽織袴
略礼装	訪問着 紋付色無地 付下げ 色無地 小紋	三つ紋付羽織袴 御召一つ紋羽織長着 紬一つ紋羽織長着
お洒落着・遊び着	小紋 紬	紬

19

“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」
今後のスケジュール

平成 27 年 8 月 6 日（木） 第 1 回審査会（於：西陣織会館）

10 月 6 日（火） 第 2 回審査会（於：西陣織会館）



11 月上旬～12 月上旬 パブリックコメント



1 月 第 3 回審査会



審査会から市長に答申



「きもの文化」選定

第1回“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会摘録

日 時：平成 27 年 8 月 6 日（木）午前 9 時 30 分～午前 11 時 30 分

場 所：西陣織会館 7 階「第 1 談話室」

出 席：柿野欽吾委員長，山路興造副委員長，池田佳隆委員，太田達委員，金剛育子委員，田中京子委員，野瀬兼治郎委員，服部正毅委員，宗田好史委員，山崎さちよ委員，吉田満梨委員
（欠席：井上委員，藤井委員）

1. 開 会

2. 挨拶

門川市長：京都は文化財の宝庫であり，国宝や重文以外にも重要なものがたくさんある。これらがなくなると京都が京都ではなくなる。そうしないために市民が自ら守る仕組みを作ったらどうか，というお話を柿野先生からいただいたのが「京都をつなぐ無形文化遺産」という京都の独自制度を創設するきっかけとなった。市民が文化財のよさをともに認識し，次代に継承し，かつ発信していくための制度である。

パートナーシティ提携を結んだトルコ・イスタンブールの市長曰く，トルコでは男性の民族衣装は，民族舞踊をする人が舞踊をするときだけ着ている状況だが，公式行事のみならず日常生活においても「きもの」を着続け，大切にしている日本は素晴らしい，とのこと。

ただし，この状況も百年後はあぶないと思うと，いま頑張る必要があると痛感する。本日はよろしくご議論をお願いしたい。

柿野委員長：市民のなかには普段「きもの」とは馴染みの薄い方もおられるだろうが，この選定をきっかけとしてあらためて「きもの」の魅力に気づき，「きもの文化」の大切さを知り，「きもの文化」を担う一員になっていただき，できれば実際に「きもの」を着ていただいて，海外に向けても発信することができれば，と思う。委員のみなさまには忌憚ないご意見を賜り，3 回でとりまとめて市長への答申としたい。

3. 制度説明（事務局）

資料：“京都をつなぐ無形文化遺産”制度の概要，第 1 回審査会の論点，きもの文化に関する事務局資料。

参考資料：西陣織帯出荷量推移，京友禅生産量，西陣織の企業数・織機台数・従業者数の推移（統計データ），“京都をつなぐ無形文化遺産”「京・花街の文化」選定書。

（略）

4. 議 事

（制度について確認）

山路委員：有形の文化財に関しては戦前から保存継承の理念が謳われていて，無形の文化財に関して指定・登録するという制度は戦後からできたのだが，それが 60 年経って破綻してきている。保存団体を作って伝統芸能を指定・登録するという方式のために，本来継承すべき地域住民から離れてしまうということが起きていることが多いのが問題なのだ。それに対して京都市は，特殊な保存団体が維持しているものが「財」なわけではなく，地域住民が受け継いでいる広い意味での「文化」をあらためてきちんと認識してもらい，後世に伝えてもらうために選定・登録するということを考えている。私もそれが正しいやり方だと評価しているということをはじめに申し上げたい。

(京都における「きもの文化」とは)

柿野委員長：「きもの文化」と言ったときにおおまかなイメージは共通しているだろうが、細部については多岐にわたろうかと思う（例えば、もんぺや甚平を含めるかどうか）。「きもの文化」の範囲や対象について、みなさまからご意見をうかがいたい。

宗田委員：この政策を産業観光局がやるのではなく、文化市民局がやるということが重要であり、市民ぐるみで、というのが狙いだ。「文化」は人に宿るということから、「きもの文化」は誰が担っている（支えている）のかを考えると、作っている人、買ってくれる人、着てくれる人、（自分は着ないまでも）見てくれる（愛でる）人、そういう範囲があることがわかる。どういう市民が「きもの」に期待しているか、「文化」と捉えているかを確認しながら進めたほうがいい。（産業観光局の政策なら、作る人、買ってくれる人の範囲でよいのかもしれないが。）

なお、「日本酒で乾杯」条例は全国に普及した。あれぐらい市民に歓迎されたものも珍しい。みんな、最初の一杯は日本酒を飲みたかったのだろう。宇治茶を中心とした茶文化を世界文化遺産に（府）、伝統木造技術を世界文化遺産に（大工棟梁等）といった運動にもいえることだが、市民ぐるみの運動に発展させるには、「きもの文化」の範囲はかなり大きくとったほうがよいと思う。

金剛委員：この酷暑のなか、この会議にはできれば洋服で来たかった。きものにはそういう厳しいところがある。これだけ生活様式も若い人の意識も変わってくると、きものを取りまく状況は本当に厳しい。ただ、きものはやはり奥が深いと思うのは、（きものと切り離せない）能装束に昔のものほどすばらしいものが多いから。昔と同じものを、と思っても技術が残っていないのでできない。きもの文化は京都の美意識の集大成だろう。奥深さ、成熟さを内包している。色一つとっても現代の色味と違って微妙で奥が深い。浴衣を楽しんでいる若い人を多くみかけるいまこそ、押しつけ、決めつけでなく、いろいろな楽しみ方を提案すればよいのではないか。

山路委員：今日、野洲の自宅から JR に乗り地下鉄に乗り継いでここまで歩いてくるのに、きものを着ている人はたった一人だった。たぶんお茶やお花をやっている人だろう。それに対して、祇園祭や各地の花火大会では浴衣を着ている若い男女が本当にたくさんいる。京都に生まれ育った人は祇園祭にはあまり来ないので、浴衣を着ているのは、外国人や近郊の人たち（外国人向けツアーのなかに浴衣体験があるようだ）。京都人はこんなに暑いときにわざわざ着ていくという気はない。京都にきものが似合うと思っているのは外からの目だ、という現状は悲しい。

太田委員：前回の「地蔵盆」では、風習としては近畿圏域に広がっているものの、「京都の地蔵盆」といったときに京都の市街部でのコミュニティを成立させてきた特殊性を指すことができた。そうすると、今回「京都におけるきもの」とは何を指すのか。「京都としての」の意味は？（そうすると、区画的な施策も打ち出せる。） また、モスリンなど実用きものについても範囲として考えてよいのだろうか。

(誂えきもの・日常のカジュアルきもの・多様性)

吉田委員：私はマーケティングの研究をしているが、ユーザーとしてきものを着るようになったので、業界のことも調べるようになった。いま、きもの需要は少しずつだが増えているのではないかと、思っている。大きな背景としては、30～40 歳代の女性が「誂え」ではなく「アンティーク」をスタートにきものに親しむという、新しいタイプの着方をしていることだ。高級な染め呉服がいいという人もいれば、アンティークでもリサイクルでもミシン縫いでもいいという人があるなど、多様化している。これが「京都のきもの」よね、と市民が思えるものとしてカテゴリー化できるとすれば、業界に対しても大きな貢献になると思う。

私は京都出身ではなく、しかも個人的見解だが、他都市ではきものをファッションとして捉え、個性を表現するために着ている方が多いのに対し、京都はある意味特殊で、お茶お花、仕舞などのお稽古事と関連して、きちんとした形を守り大事にしている。また、江戸時代から考えると、大消費地としての江戸の武家社会のなかで小袖が発生したのが、いまの東京のきもの（現代でいえばスーツ的感覚か）に引き継がれていき、これに対し、京都は行政の中心でもなく、かつて宮廷文化が発達していたという歴史もあって、もう少し華やかなきもの、はんなりとしたきものが好まれてきたのではないか。私はうまく表現できないが、「京都らしいきもの」とはどんなものかを言語化することが大事だろう。

山崎委員：事務局資料には硬い文言が並んでいて、30 歳代の市民が「着たい！」とは思わない。「着たい！」「愛でたい！」に至るよう刺激して、きものを着ればこんなにいいことがあるよ、と提示したほうがいい。

一昨年と去年、フランス・イタリアに行った折にきものを着たが、素晴らしい民族衣装と絶賛され、日本人であることをきもので再認識した。きものってそういうものだし、きものを着ることによって自分の魅力が向上するよ、ということのを若い人たちに伝えられたら、と思う。

柿野委員長：若い人にとっては、着てみたいと思うきものに巡り会わないという感じか？

山崎委員：そのとおりだが、着ない人に理由を聞くと、着方がわからないし、着てどこに行けばいいのかわからないという。きものを着たらお茶お花をしなければならないわけでもない。私が最初にきものを着たときは普段着だったからということもあるが、普通にスーパーに買い物に行った（高級きものと普段着の違いはあるけれども）。

また、保存方法、片付け方がわからないとも聞く。洋服と同じように扱ってよい、ということが市民に伝われば、もっと気軽に着てもらえるだろう。

田中委員：私はきものリサイクルショップをやっていて、アンティークといってもコレクター相手のものでない。市場で買い付けはせず、不要な人から必要な人への橋渡しをしているだけだが、大正末期～戦後の頃の、実際に家庭で着ておられたものがたくさん出てくる（友禅はデリケートすぎて普段着ではない）。実際に家庭で大事に着ていたという痕跡（かけはぎやはぎ合せ、刺し子、作り直し）があって、柄などはとてもユニークで面白い。

山路委員：いまや、きものは特別なときの晴れ着という位置づけが当たり前になってしまっているが、これからの京都で、きものを常着として育てるという文化はもう無理だろうか。

私は前の東京オリンピックで日本人選手の行列が洋装だったのをみて、本当にがっかりした。他国はそれぞれの民族衣装で行進したのだが、日本はきもので行進しようという気はまるでなかった。あの頃から、日常にきものを着て割烹着を着て、というスタイルはなくなっていった。京都にはまだ、いろいろな行事があるから行事着としての位置づけはあるのかもしれないが、いまや、常着としてのきものはないのかな。

山崎委員：私自身は常にきものを楽しむ人間になりたいと思っているのだが…。

吉田委員：男性のなかには家で着るには楽だし、好きだという人がいる。女性は外に出ても「お稽古かしら」とみられるが、男性は目立っていやだから、もっぱら家のなかで、と。

山路委員：そう、私の上の世代の大学の先生などは、家ではきものという方が多かった。いまではほぼ全員が洋服。

宗田委員：アンティークきものを着る 30～40 代の方は、買ったものを下取りに出して新しいものを入手、というように回していくようだし、3 年前の調査で男性専門のアンティークきもの店が 3 軒あったから、フォローアップできるようなマーケットになっているかと思う。日常的にきものを着るという定義の仕方にもよるが、京都の場合は、金剛委員のようにかなり着る頻度が高い方が一定層おられて、公務員も元旦等にきものを着るなど、他都市に比べると日常生活の

なかでも着る頻度の高い方がおられ、非常に多様だ。その意味でも、若い人たちがきものをみる機会が多いのだろう。ただし、階層の上に行くほどTPOについての目が厳しい。(親しくなると細かなことを教えてもらえるので、インフラが整っているとみえるが)

太田委員：きものを着ているだけで晴れ着っぽくみえるし、決まり事が多いとはいえ、実用呉服は小物類で遊べる。サイズは問わないし、長年着られるから、安く上がる。美意識と教養は持たないといけないが。

山路委員：私の感覚では、きものが常着だった時代がずっとあったが、丸洗いのできる化繊のきものが出てくるとそれを常着として着ようになり、その後は結局それも着なくなった。京都には厳密な美意識のきもの文化が歴然とある。それがわかっている人はうっかり着られないという怖さがあるが、ここでいう「きもの文化」はそういうものではなく、きものがいかに日常的に楽しめるものであるかを認知してもらい、その普及を進め、いかに京都文化にしていけるかということだろう。

宗田委員：山路先生は「文化は変遷する」というお考えですね。戦後 70 年の市民生活のなかでもずいぶん変遷してきた。それをいかにつなぎ合わせていくかということだ。上のほうからじわじわと下りてきて、下のほうがダイナミックに変遷していくという形がいい。

若い人は着るところさえあれば着たい、と思っているし、上のほうはきもの文化の質を上げていくために、新しい創造を含め、目利きが質を引き上げていく努力が必要。これが京都のきもの文化が持つ現代的なエネルギーだと思う。これを上手にやれば日本酒で乾杯条例と同様、全国に広がる。

いまは、勝負服としてのきもの、という着方もあるようだ。母や祖母から買ってもらったきものでなく、30〜40代になり、ステージに立つ自分を華やかに装いたいというときに呉服屋さんに相談して誂える、これは新しい着方だろう。

太田委員：初心者が着たいといっても、相談できるコーディネーターがデパートにもなかなかいない。

(作り手も時代のニーズに合うものを提案すべき)

服部委員：かつてはきものの範疇に入らなかった浴衣が市民権を得て、どんどん進化している。西陣織など高級呉服は売れなくて苦勞しているが、やはりニーズに合ったものを作れていないことを痛感する。浴衣は昔は旅館の寝間着だったが、いまはきものと見間違えるような浴衣が出てきている。浴衣は綿という印象が強く、通気性のよいポリエステル浴衣も出てきているが、あまり知られていないのは残念。業界では、浴衣とアンティークきものの売り上げが好調だ。結城も大島紬も崩壊寸前というなかで、どうすればきものがもっと広がるか、東京オリンピックに向けてインパクトのある新しい提案をして、文化として根付かせたい。もう少し背中を押すと、底辺から業界がよくなる、と思っている。

野瀬委員：ここに集まる委員はそれなりに知っておられる方々だ。全国に行き、小売り屋さんと一緒に現場で売っている者として思うのは、参考資料の西陣織帯出荷量や京友禅生産量のデータで、昭和 50 年は古い(活況を呈していたときなので比較にならない)としても、平成 2 年から 26 年の 24 年間に 1/5〜1/6 に激減している。私の感覚では、家内の若い頃と今の若者を比べると、今の若者のほうがきものを着ているし、はるかに興味を持っている。嫁入り用の着ないきものを一生懸命売っていたのが、棒グラフの高い数字。データの減少はタンスの肥やし部分の減少だ。いまの出荷量は全部実際に着ている分。着ない人は買わない。グラフだけみてもわからない。売れるものは売れていて、ちゃんと儲かっている。大島紬でもいい色は売れている。染め屋さんは技術を誇っているが、色の勉強をしていなかったりする。次代に応じた提案をしていかなければならないと思う。

現場では、フォーマルではなく（もちろんフォーマルも一定程度売れているが）、おしゃれ着が売れているのだ。

柿野委員長：かつてはよいものが作られていたが、それができなくなっている。実情からいえば生産量が減少するのも仕方ないが、産地が打撃を受け、ものづくりの力が落ち込んでいるのは心配だ。

池田委員：京都でも確かにきものを着る人は減っている。昭和 41 年から染め屋をしているが、その頃からの違いは明らかで、上京・中京・下京には西陣、染め屋、流通の人の比率が高く（「紺屋の白袴」で、職人はあまりいいものは着ていないものの）きものは普段から着ていたが、そういった人口比率が大幅に変わった。かつては伝統芸能や伝統文化は、スポンサーがいたが、昭和になってスポンサーは中産階級の上の人たちになり、戦後はそんな人たちもいなくなった。いま、きものは業界人ではなく、一般の人々に買ってもらうなければならなくなり、どうすればいいかという局面だ。

柿野委員長：戦前は、大衆向けの染めも織りもやっていたのか？

服部委員：両方ともあった。戦中にタンスは空になり、戦後、衣食住が少し安定すると、やはりフォーマルきものが必要とって買われ出した。

宗田委員：嫁入りにきものを持たせたのは、いざというときに売れる、という親心だったわけだ。ただ、いまや織り商が実需にシフトして、本当に着てもらえるきものを売り、きもの文化を支えていくべきだと言われると、本当に勇気ある発言だと思う。

池田委員：昭和 40 年代は、高級呉服もちろんやっていたが、大衆呉服も多かった。その減り方はすさまじく、その頃を 100 とすればいまは 1 もない。当時は、染めもあったが、モスリンもポリエステルもアセテートも多かった。

田中委員：私の店のリサイクルに出てくるのは、そういう勢いのあった頃の、楽しんで着ていたものが多い。いかに手を抜きながら楽に着ようとしているかがわかる。今、着付け教室で教えるているのは「こうして着るものです」「こういう風にしないと」と几帳面すぎる。日常的に筒袖を楽しんで着ていたような時代に戻ることはないだろうが、家庭内の伝承が途切れ、まったく新しいファッションのようにカジュアルに着るきものが注目されているのであれば、選定案の「雅」なイメージばかりでなく、「カジュアルに着る」ということもコンテンツに入れたほうがよい。

野瀬委員：男性にきものを着たことがあるか、それはいつか、と聞くと、正月という。しかし、それは 30 年ぐらい前までの話であって、いま正月に緊張がない。かつては節目としての厳粛さがあったが、いまは冬期休暇期間の真ん中なだけ。もう一つは結婚式だが、いまの結婚式は最初から二次会みたいなものだ。「節目」が変わってきている。そういう時代に対応していかなければならない。（カジュアルな結婚式に、留め袖を着ていっても似合わない。）

きものが似合うシチュエーションをきちんと提案してあげることが大事だ（それなりの旦那さんには浴衣でなく、夏の上等なきものを紹介すると買ってくれる）。着付けができないとか、保管方法などは二の次の話だ。

山路委員：男性のきものを、若い女の子たちはかっこいいと思っている。

（扱い方や保存方法という課題について）

柿野委員長：いまでも友禅や帯は、絹がいいのか、あるいは絹にはこだわらないのか。絹は神経を使うので、合繊のほうが若い人には受け入れやすいと思うが、実際はどうか。

服部委員：帯は締めるものだから、絹でないときりっと締まらない。

池田委員：きものは、昔はずいぶんポリエステルもあったけれど、いまは絹が多い。いまの新技術のポリエステルならいいきものができると思うが、あまり作っていない。

服部委員：材料が絹だけであればクリーニングはできるが、金銀糸を使っているとかえって特殊なシミ

落としてないといけない。

池田委員：子どもの七五三や、卒業式のきもの・袴などは、汚れたときの心配をしなくてすむのでポリエステルが増えている。ただし刺繍糸に絹を使っていると洗濯はできないから結局は同じ。

野瀬委員：そういうものはレンタルも多いが、母親の仕立て直しもある。

宗田委員：代々受け継ぐのはいいが、洗い張りまで文化を受け継ぐのは面倒。

田中委員：また、いまの若い人は環境に優しいとか、エコやナチュラルを気にする人が多い。

柿野委員長：長時間にわたり、ご意見を賜りありがとうございました。考えてみると、先ほど紺屋の白袴と言われたが、きものにまつわる諺は多く、きもの文化が廃れるとそういった表現も死語になるだろう。そういうことも選定案には付記していただくとよいと思う。次回は、今日の議論を反映した事務局素案をベースに、また論議していただきたい。

(了)